

# 怪物化する『従妹ベット』とは

沖久 真鈴

## 1. はじめに

本稿は、バルザック最晩年の大作『従妹ベット』(*La Cousine Bette*, 1846)<sup>(1)</sup>の登場人物たちにおける人物造形に関して、「動物学」という観点から考察を行うことを目的とする。

初期の作品『フェラギュス』(1832)の一節に「もしパリの人間の群れを動物学のさまざまな分類部門になぞらえてみるのが許されるなら」<sup>(2)</sup>とあるように、バルザックは人間を描く際、たびたび動物のイメージを用いる。たとえば「ライオンのように」という比喩を前にするとき、博物学的に見れば、堂々とした体躯、雄々しい唸り声、肉食獣特有の鋭い牙や光る目などを連想するし、イソップなどの動物寓話から見れば、王様のイメージを、19世紀の読者たちはダンディーのことを「ライオン」と呼んでいたので、お洒落な男性を連想するだろう。登場人物を描くとき、動物比喩を使えば、連想ゲームのようにたくさんのイメージが一瞬にして沸き起こり、より生き生きとダイナミックに人物を創り上げることができる。それゆえ2000人も登場人物を生み出したバルザックは、同じく多種多様な動物を小説の中に用いたのである。バルザックの動物への興味はまずは、人間喜劇の総序で言及されている。そもそも人間喜劇の理念は人間界と動物界とのあいだの比較から出てきたのであり、博物学者ビュフォン(1707-1788)が「動物種」において成したことを「社会種」において実現させようとした試みなのだ。しかし、単純に人間を動物種のように分類することはできない。なぜなら、「社会的地位」には自然界には起こらないような偶然があるからである。というのは、動物は生まれた種の境を超えることはないが、人間は、社会的に成り上がったり成り下がったり、ときには人種や性別を偽っ

たり変更することもできる。バルザックは「動物の間にはほとんど全くドラマがなく混乱も起きない。動物は互いに相手に追い迫るが、それだけのこと。人間も同様に相手に追い迫るが、知性の多い少ないによってその闘争が複雑になり、動物とはわけがちがう」と言っている。では、「動物学」の視点から人間社会ドラマ『従妹ベット』を見てみたらどうなるだろうか。そこに動物はどのような形で貢献しているのだろうか。さらに、晩年の作品『従妹ベット』には怪物 (monstre) という語が多用されている。バルザックの作品群のなかでこの語が登場する作品は57作品あるが、1作品につき平均3回程度の使用頻度である。しかし『従妹ベット』においては15回も使用されている<sup>(3)</sup>。この作品は、なぜ群を抜いて多いのか。動物比喩ではだめなのだろうか。これまで通り動物比喩を多用しながら、怪物までも頻出させた理由はなんであろうか。動物から怪物へ、バルザックの作品に込めたメッセージを読み解きたい。

では、ストーリーを追いながら、動物と怪物に例えられる登場人物たちをみていこう。

## 2. 登場人物にどんな「種」が見られるか

### 2-1. ベットにおける動物比喩とは

ローレーヌの国境近く、ヴォージュ山脈のふもとにアドリーヌ、リスベットという従妹同士が住んでいた。アドリーヌは絶世の美少女だが、リスベットは「ぎすぎすして痩せていて、肌は浅黒く、黒光りする髪に、濃いげじげじ眉、がっしりとした長い腕、ごつい脚、猿 (singe) に似た長い顔にはいぼがある」<sup>(4)</sup>「まるでサヴォアから来た猿回しが連れて歩く、あの猿が女の服装をしているのかと思わせるほど」<sup>(5)</sup>という見た目の百姓娘だった。リスベットは略してベットと呼ばれているが、「獣」を意味する「bête」と同じ音であるため、彼女の田舎くささや、野蛮な気質が強調され、アドリーヌと対極の存在として描かれている。美少女アドリーヌは、村を通りかかった陸軍の高官ユロに見初められ、一躍男爵夫人となる。優しいアドリーヌは、不遇の醜い従姉ベットを貧しい生活から救い出し、結婚させようとパリへ呼び寄せたが、強情で頑固で野蛮 (sauvage)<sup>(6)</sup>なベットは、縁談話を片っ端から断ってしまった。喧嘩の際、頭と頭

を突き合わせ一歩も引かない「ヤギ (chèvre)」のようで、ユロ男爵から「雌ヤギさん (chèvre)」というあだ名をつけられた<sup>(7)</sup>。束縛をきらい、ユロ家に住む部屋があるにもかかわらずルーヴル宮の横の貧しいアパートの一室に住んでいる。この界限は、ナポレオンがルーヴル宮の改装を仕上げようと決意して以来、解体することになっていた古い街並みのひとつで、バラック建てが続く、薄暗いボロ家街である。パリの真ん中であって、栄華と貧困が共存している場所なのである。この時代の、変わりゆくパリの街並みがみてとれるとともに、常に隣の芝を青く見て妬みを抱えるベットの境遇を象徴しているような場所だ。ときどき心の中でこうつぶやく。「アドリーヌと私は同じ血を受けている。父親は兄弟同士だった。それなのにあのひとは邸宅に住んでいるし、わたしは屋根裏にくすぶっている」。二人は同じ場所に、同じ血を分けて生まれた同一種であるにもかかわらず、社会的地位の差が生まれている。ユロ家の世話にならなないと生きていけない家畜のような身であるから、ベットが一家の秘密をばらしたりすることは決してないだろうと油断されており、打ち明け話をされやすい。しかしベット自身には大切に隠し、愉しんでいることがある。それが奪われたら、ベットはどうなってしまうだろうか。

## 2-2. 動物比喻から分かるベットとヴァンセスラスの関係とは

ベットの密かな楽しみごととは、5年ほど前から同じアパートにいる若い彫刻家を養っていることだ。自殺しようとしたところを助けてやったポーランドの亡命貴族、ヴァンセスラス・シュタインボックである。シュタインボックという語はドイツ語で「岩の動物」または「シャモア」(animal des rochers ou chamois) を指すのだとベットに言い、作品にサインとしても掘っている<sup>(8)</sup>。シャモアとは山岳地帯にすむ野生ヤギであるから、雌ヤギと呼ばれているベットはこの哀れなポーランド人に同族意識を感じたのではないだろうか。彼を世話して世に出してやりたいという母親的な思いと、このまいつまでも屋根裏に閉じ込めておいて世間のどんな女にも渡したくないという「ドラゴン (dragon)」<sup>(9)</sup> や「虎 (tigre)」のような獷猛な嫉妬心 (féroce jalousie)<sup>(10)</sup> とが心の中で葛藤していた。ユロ家では家畜のようなベットだが、ヴァンセスラスに対しては支配者であり、彼に食事を運ぶ様子はまさに飼い犬 (chien)<sup>(11)</sup> におや

つを運ぶようだとたとえられる。ヴァンセスラスは「パリ動植物園に繋がれたライオン (lion engagé au Jardin des Plantes)」<sup>(12)</sup> のように砂漠を眼の色に映し出しており、野生の眼の輝きや力強さはベットによって封じられてしまっている。

では、嫉妬や劣等感の塊のようなベットと対極の女性アドリーヌにはどのような比喩が使われているのだろうか。彼女に言い寄る男、クルヴェルとともにみてみよう。

### 2-3. 俗なる人間クルヴェルと聖なる人間アドリーヌに使われる動物比喩とは

ユロ男爵とアドリーヌの間にはふたりの子供がいる。一人は弁護士になった息子のヴィクトランで、クルヴェル家の娘と結婚した。もう一人は娘オルタンスで母親に似て美しいが未婚である。父親ユロの女遊びが度を過ぎて、娘に持たせる持参金が用意できないのだ。そこで、クルヴェルはアドリーヌを訪ね、かつてクルヴェルが大事に囲っていた「野生の牝鹿 (biche sauvage)」<sup>(13)</sup> のような女優ジョゼファをユロに横取りされた恨みがある、その時自分はまるで「子供を取られた虎 (tigre à qui l'on a enlevé ses petits)」<sup>(14)</sup> のようなありさまになったので、その報復としてアドリーヌが自分のものになりさえすれば娘の持参金は出してやると迫る。しかしアドリーヌは自分の美しさを利用して「狼 (loup)」<sup>(15)</sup> をおびき寄せる罫にはしたくないと言い、拒絶する。

クルヴェルが虎や狼、その愛人が野生の牝鹿である一方、アドリーヌは、夫の浮気を黙認し許容する「傷ついた鳩 (colombe blessée)」<sup>(16)</sup> であり、貞淑で静かに耐え忍ぶ態度はひたすらに「天使」や「聖母マリア」<sup>(17)</sup> にたとえられる。「アドリーヌは優しさと従順さこそ、女の最も強い武器なのだという確信をますます強めた。しかし彼女は思い違いをしていた。気高い感情も極端になってしまえばひどい悪徳と変わらない結果を生み出してしまう」<sup>(18)</sup> と書かれている通り、夫を人間や動物をも超えた「色欲の怪物」に育てあげる結果となってしまうことに彼女は気が付かない。のちに、夫のために精神をすり減らし、気を失う場面でアドリーヌは「意識は完全に失っているのに、神経性の震えだけは止まらずに、切られた蛇の胴体がピクピク動くのとそっくりだった」<sup>(19)</sup> と描写される。天使やマリア、翼を持った鳩といった天上的で聖なるイメージの比喩か

ら、地を這う蛇へと比喩も引きずり降ろされているのが印象的である。

夫への優しさと従順さこそ女の最大の武器であると信じるアドリーヌに、対抗する女が二人いる。それはベットとヴァレリーである。彼女たちが社会的に危険性のない女からある事件をきっかけに「復讐の怪物」になるまでの様子を見ていこう。

#### 2-4. オルタンスとヴァンセスラスの恋愛が生み出したものとは

ある日、オルタンスはベットに恋人の存在を聞き出そうとする。「きっとヤギ髭を生やした年寄り奉公人の怪物にちがいないわよね？ (Ce doit être un monstre de vieil employé à barbe de bouc ?)」<sup>(20)</sup> と言い喧嘩を売ると、ベットはついヴァンセスラスというシャモアですと、その存在を漏らしてしまう。秘密を聞き出したオルタンスは父親とヴァンセスラスに会いに出かけ、彼の彫刻を見る。ヴァンセスラスは美しいオルタンスを見て、灰色の眼がキラキラと輝き、二人は「炎の眼差し」を交わし恋に落ちる。ヴァンセスラスはもはやベットの飼い犬でもなく、鎖に繋がれたライオンでもなく、野生性を取り戻したライオンになったのである。そしてベットに内緒でオルタンスとヴァンセスラスは婚約をする。飼い犬に手を噛まれたベット。主従関係が逆転した時、ベットはどうなってしまうのか。

#### 2-5. もう一人の女ヴァレリーとユロの関係が生み出したものとは

ベットのアパートには、ユロの部下であるマルネフ夫妻が住んでいた。マルネフは「ヒキガエル (guenille)」<sup>(21)</sup> のような醜悪で、嫉妬深い湿っぽい男である。夫人のヴァレリーは、とびきりの美女でモンコルネ伯爵の私生児として生まれ持参金をもらい陸軍省の下級官吏であるヒキガエルのマルネフに嫁いだが、昔の贅沢な暮らしをやめることができない。「必要に迫られない限り、走りも飛びもしない、あの猫 (chat) のようなのらくらした性癖」<sup>(22)</sup> を持っている。しかし、明日にも差し押さえを受けそうな貧困の土壇場に追い詰められて、ヴァレリーはとうとう、旦那の上司ユロを誘惑する。天才的な、生まれ持った娼婦気質でユロを飼い慣らし、金を巻き上げていく。この種の女はうわべでは貞淑な人妻を装っているため男たちは破滅する危険性に気が付かない。ユロは、ヴァ

レリーに近づくために、まずはベットとヴァレリーを引き合わせた。ヴァレリーもユロ家の動向を窺うためにベットを利用するつもりでベットと交流を求めた。これが事件の幕開けであった。

## 2-6. ベットの怪物性が開花するとき

ヴァレリーはベットを部屋に招いた際、ユロから聞いたオルタンスとヴァンセスラスの婚約話を聞かせた。これによりはじめて自分が裏切られ欺かれていたことを知ったベットは次のように激昂する――

マルネフ夫人は闘牛士の役を途中でやめた。ベットが怖くなったのだ。ローヌ女は恐ろしい顔をしていた。射るような黒い眼は虎の眼のようにすわって睨みつけている。その形相のすさまじさは古代ギリシアの巫女のものかと思うほどで、ガチガチ言わないようにキッと歯を食いしばり、ものすごいけいれんで手足がぶるぶると震えている。ひん曲がった手を帽子の中に突っ込んで、ごしごしと髪をかきむしり、重くなった頭を抱えていた。頭が燃えていたのだ！ 荒れ狂う火の手が、噴火でできたクレパスのように顔のしわの一つ一つから噴き出しているようだった。それは崇高なまでの光景だった<sup>(23)</sup>。

闘牛士 (picador) がひらひらと揺らす布を前にして地面を掻きながら、今にも怒り狂って突進してきそうな闘牛 (taureau) にベットがたとえられ、緊張感が表現されている。その眼は「虎 (tigre)」のように残忍で、ガチガチと鳴る歯や、鋭い爪が飛び出してきそうなひん曲がった手の描写からも肉食獣の危険性を彷彿とさせる。「しっかり牙を研いで、うまい汁を吸えるようにしましょう (aiguisons nos dents et tirons du râtelier le plus de foin possible)」<sup>(24)</sup> とヴァレリーにユロ家への復讐を持ち掛ける。金が欲しいヴァレリーも復讐に協力することを決め、本性を隠した二人の女は手を組んだ。バルザックはベットのすさまじい怒りと復讐へ猪突猛進に突き進む勢いを、「処女性」の力によるものだと説明する――

「処女性」は、ほかの奇形もみなそうだが、一種特別な豊かさに満ち溢れ、すばらしい偉大さを備えている。処女の女性は、エネルギーを浪費していないので、生命力

に、抵抗力と計り知れない持続力が備わっている。頭脳はこうして温存された諸能力のすべてを集めて豊かな発達を遂げるに至る。純潔な人々の心身は、行動に出る時も、思考に訴える時も、筋肉には鋼が備わり、知力には天与の知恵が備わっているのがわかる。「意志」の悪魔的な力というか、黒魔術というか、不思議な力を見出すのだ。この点から見れば処女マリアは、いったん象徴として考えれば、インド、エジプト、ギリシア、どこの処女と比較してもその偉大さは他を圧倒している。物事の偉大なる母なる「処女性」はもろもろの偉大なものの母であり、その白い美しい手に、いと高き世界の扉の鍵を持っている。要するに処女というこの巨大で恐るべき例外性は、カトリック教会からそれに授けるすべての美德に恥じない価値を備えているのである。(…)彼女は妥協のない「憎悪」と「復讐」の化身になった<sup>(25)</sup>。

バルザックは「処女性」を一種の「奇形／怪物性 (monstruosité)」だと位置づけている。そして「計り知れない (incalculable)」力を持ち「巨大で恐るべき例外性 (grandiose et terrible exception)」であると言っている。そしてこの力が怒りのきっかけによって爆発したベットは妥協のない「憎悪」と「復讐」そのものになった (Elle fut la Haine et la Vengeance sans transaction)」とある。バルザックは「憎しみ」について以下のように説明する――

愛と憎しみはどちらもおのずと成長していく感情だが、二つのうち、憎しみのほうが寿命が長い。(…)愛は命と生産性から力を得る。ところが憎しみは死や貪欲に似た、一種抽象的な活力であって、生きた人間や物事を超越している<sup>(26)</sup>。

ベットが、「憎悪」そのものになったというのは、つまり「生きた人間や物事を超越 (au-dessus des êtres et des choses)」した存在になった、ということになる。すなわち「怪物 (monstre)」である。社会的弱者であった当時は猿、雌ヤギにたとえられ、唯一上位に立っているヴァンセスラスの前ではドラゴンや虎として振る舞い、それが脅かされた時怒りによって処女性の持つ力が開花し、人間でも動物でもない怪物に変身したのだ。この怪物の力はユロー家への復讐に向かっていくが、処女マリアと同じく、偉大なものを生み出す力と、いと高き世界の扉の鍵もまた、持っている。ベットを単に社会悪として片づけることが出来ない位置にバルザックが据えていた予感がする。

さて、野生的であったベットはこれ以降、命をかけて知力を尽くすようになった (Elle consumait sa vie et dévouait son intelligence)<sup>(27)</sup>。ヴァレリーと結託して

金を貯え、財産の利子がどれだけ増えたかを確認するのを楽しむようになったのだ。ヴァレリーから「はじめは飢えた雌ヤギだったけど、終わりは雌ライオン (lionne) になれそうね」<sup>(28)</sup>と言われるまでに力を持つ。ヴァレリーからの呼びかけも「待って、虎さん (tigresse)」<sup>(29)</sup>に代わる。その爪も、牙も、決してユロ家では出さぬよう普段は仕舞っていて、ユロ家の動向を「まるで巢の真中で見張っている蜘蛛 (araignée)」<sup>(30)</sup>のように、ひとりひとりの顔を観察していた。

では、怪物ベットと手を組むヴァレリーはどんな女だろうか。

## 2-7. ヴアレリーの怪物性とは

ヴァレリーは「女というより女の姿をした蛇 (serpent)」であり、しばしば「悪魔」や「魔女」にたとえられる。ユロ家の女たち、アドリーヌと娘オルタンスとは正反対の存在である。アドリーヌは貞淑で自分を犠牲にして苦勞を耐える良き妻であることをモットーとする「天使」「聖母マリア」であり、夫を崇拜する態度はジョゼフィーヌ妃がナポレオンに向けた愛情にも例えられる。オルタンスも、「犬 (chien) が主人にたいするような態度」<sup>(31)</sup>で夫に接していた。二人とも、盲目的に夫に従順で、自分の頭で考えない、家庭の枠から出ることはない女性たちだ。しかしヴァレリーは男たちの好みをたちどころに見抜き、それぞれの理想の女性像に自らを同化することが出来る。お茶を出すときの腰の揺らし方、見つめ方、声の抑揚などを駆使して相手を魅了する。それは「戦術」や「コケットリーのアウステルリッツの会戦」<sup>(32)</sup>とたとえられる。ヴァレリーの前では男たちが犬 (chien) となり、ヴァレリーがナポレオンさながら崇拜される主人なのである。そこにはやはり知性 (intelligence) が働いている。「悪徳は天才と似ている」とされ、男から「これほど知的で魅力的な女性には会ったことがない」<sup>(33)</sup>と言わしめる。ベットも命を懸けて知力を尽くしているし、ヴァレリーも知性を使い戦っている。その一方、アドリーヌはいざ金に困ってクルヴェルを誘惑して金を工面しようとした場面で、どう振る舞ったらよいか分からず、la baronne ne savait pas…、elle ignorait…、elle n'aurait rien su…<sup>(34)</sup>、という語が繰り返し使われ無知が強調されている。戦術を一切知らないユロ家の女性たちは、ヴァレリーから言わせると「ただの美しい肉片」「赤毛のキリン (girafe)」<sup>(35)</sup>だ。一方ヴァレリーは「虎 (tigre)」<sup>(36)</sup>にたとえられ、誘惑した男



怪物化する『従妹ベット』とは

たちは、「口にくわえこんだ獲物 (la proie qu'elle a dans la gueule)」<sup>(37)</sup> と表現される。ヴァレリーは男たちから「つかみどころのない鰻 (anguille)。だが鰻のなかでも一番きれいな鰻」<sup>(38)</sup> と称され、自分のものにするのが難しいが、爪や牙があるとは思われていない。その上「男を羊 (mouton) に変えてしまって、しかも彼らに、自分はライオン (lion) だ、鉄のような性格だと信じ込ませておく」<sup>(39)</sup> ことが彼女の戦術だ。

野心的なヴァレリーはユロに飽き足らず、ヴァンセスラスをも誘惑しオルタンスから奪う。その動機はベットと結託したユロ家への復讐にとどまらず、他の女が持っているものは何が何でも自分のものにしたい、という歯止めの利かない私利私欲である。そして自分の力を恐れず立ち向かってくる「美德」を決して許さないプライドがある。男たちだけでなく、夫に従順で優しいことが最良であるという「美德」を振りかざす女たちをもひざまづかせたいのである。ついに物語後半でアドリーヌはヴァレリーの力に屈し、長椅子に倒れて痙攣しながらこう叫ぶことになる――

あの女の言う通りにしてちょうだい。ああ、怪物だわ！あの女は全部知っている！<sup>(40)</sup>

「怪物 (monstre)」と称されたヴァレリーはこの後も夫マルネフの死後、パリの区長として政治的にも実力者となったクルヴェルと再婚し地位を上げる。さらにいずれクルヴェルが死んだら貴族の称号を手に入れようと狙いを定めていた男がいる。それが、ブラジル人のモンテス・ド・モンテジャノス男爵だ。しかし彼がヴァレリーの計画を狂わせてしまう。怪物的な女ヴァレリーを破滅に追いやる男とはいったいどんな人物でどんな動物比喩が使われるのか。

## 2-8. 怪物ヴァレリーの計画を狂わせたモンテスとは

モンテス・ド・モンテジャノス男爵はヴァレリーの初恋の相手で三年ぶりにヴァレリーの前に現れた。彼は次のように描写される――

半獣神サテュロスのように突き出た額は一途な情熱のしるしだが、その額の下には、澄んだ二つの瞳がキラキラと輝いている。その瞳は男爵の母親が彼を身ごもった時、ジャガーか何かになでも怯えたのかと思わせるような野生的な光を放っていた<sup>(41)</sup>。

これまでパリのヴァレリーの周りにいたような男たちとは明らかに違う、ジャガー (jaguar) のように暗闇でも目だけが光る、猛獣を連想させる男である。ヴァレリーはモンテスに「あなたは世界でただ一人、私に愛されている男よ。このことを虎 (tigre) みたいなあなたの頭脳の中をしっかり叩き込んでね。」<sup>(42)</sup>と語る。呼びかけるときは「わたしのためにブラジルの原生林から出て来た美しいジャガーさん」<sup>(43)</sup>と言う。また、「わたしは、わたしのジャガー以外に誰一人愛したことはないし、愛するつもりもない」<sup>(44)</sup>と言っている。ジャガーは南北アメリカに生息するネコ科の猛獣で、とくにブラジルのジャガーが個体としては最も大型である。虎にもたとえられるモンテスだが、虎はビュフォンの『博物誌』によるとライオンと違って残忍な性格であるとされている。虎は空腹を満たすためというより、むしろ、怒りを晴らすために死を与える、とある<sup>(45)</sup>。ヴァレリーはこのモンテスを怒らせてしまったことによって自らが殺される結果を招く。

モンテスはヴァレリーの言葉を鵜呑みにし、唯一愛されている男であると信じていた。ある夜会で隣に座っている美女に目もくれない様子が「もぐもぐと草を食んでいる牛 (bœuf)」<sup>(46)</sup>とたとえられる。その場にいる全員が、モンテスはヴァレリーに裏切られていることを知っており、モンテスをからかう。モンテスはヴァレリーの裏切りを信じられず、その証拠を見せて欲しいと懇願する。そしてついにヴァレリーとヴァンセスラスの密会現場に連れていかれ現実を目の当たりにする。怒りによって覚醒したモンテスは「虎に変身した (métamorphosé en tigre)」<sup>(47)</sup>。そしてブラジルにしか解毒剤がない血液を破壊させる伝染病をヴァレリーに仕込み、そのせいでヴァレリーは歯も髪も抜け落ち、爪も剥げ、見るも無残な状態に腐り、死んでしまう。ヴァレリーを失ったベットも後を追うように、復讐が未完のまま死んでしまう。物語の最後まで生き残る怪物がユロ男爵である。彼の怪物ぶりをみていこう。

## 2-9. 色欲の怪物ユロとは

ユロは少女好みで、13歳の女優ジェニー・カディーヌを愛人としながら、クルヴェルの愛人だった13歳の歌手ジョゼファも横取りして入れ込んだため、実の娘に持たせる持参金が用意できない。それに懲りず、部下の妻ヴァレリーに

も手を出す。家庭は貧困に陥り、外見に気を払うことを辞め、なりふり構わず浮気にまい進する姿は「美しい人間の廢墟」と言われる。ゼイゼイと息を切らせてのたうちながらヴァレリーの部屋まで階段を登って来る姿は「アザラシ(phoque)」<sup>(48)</sup>にたとえられ、「鼻孔の中にはヒレ(nageoire)」<sup>(49)</sup>が生えていると描写される。ユロは「常軌を逸した情熱(passion insensée)」<sup>(50)</sup>をもって浮気をしている。浮気を続けるため、ついに妻アドリーヌの叔父フィシェールの会社の金を流用して破産させてしまう。そのうえ、ユロに絶大な恩義を感じているフィシェール老人に、アルジェリアで糧秣関係のあくどい仕事をやって金を作ってきてくれと頼んで送り出した。しかし、フィシェール老人からユロに手紙が届き、そこには不正が発覚したため、ユロに被害が及ばないよう獄中自殺をする旨が書いてあった。このことがユロの兄、ユロ元帥に知られ叱責される。元帥は「老いたる獅子(vieux lion)」<sup>(51)</sup>とたとえられ、その髪は「たてがみ(crinière)」<sup>(52)</sup>のようだと描写されている通り、ライオンのように堂々として正義感と威厳に満ちている。彼を前にして、ユロは自身を「罫にかかったキツネ(un renard pris au piège)」<sup>(53)</sup>と表現する。元帥はユロにこう言い放つ――

それとも君はわれわれとは人種が別にできているのか？もはや人間でなくなって、情欲そのものになってしまった時点で役所をやめるべきだったのに！<sup>(54)</sup>

さらにバルザックはユロの浮気気質について以下のように語っている――

女たらし、という自然が愛欲に与えた限界を超えて、女を愛する貴重な能力を授けられたこの連中は、たいてい齢を知らない<sup>(55)</sup>。

ユロの「もはや人間ではない情欲そのものになった(vous n'étiez plus un homme mais un Tempérament)」というの、ベットにおける「憎悪」と「復讐」そのものになった(elle fut la Haine et la Vengeance sans transaction)」の表現と類似しており、ユロの「自然が愛欲に与えた限界を超えた(au-delà des limites)」存在というの、ベットが「生きた人間や物事を超越(au-dessus des êtres et des choses)」した存在であるのと類似している。またユロが持つ「常軌を逸した情熱(passion insensée)」というの、ベットの持つ「計り知れない(incalculable)」力、「巨大で恐るべき例外性(grandiose et terrible excep-

tion)」と類似している。よって、ユロも「怪物」であると言えるだろう。

弟の不祥事に打撃を受けた元帥は心労で死んでしまう。家庭崩壊だけでなく周囲をも巻き込んで浮気が原因で死者を二名出したユロは自分は家にいないほうが良いのだと家出をする。しかしその先で頼ったのは、かつての愛人ジョゼファであった。懲りないことに、16歳の美少女オランプ・ビジューを紹介してもらい、刺繍店を開業し一緒に暮らし始める。アドリーヌが夫を探し回り居場所が見つかりそうになると姿をくrams生活を数年続けていたが、ユロの逃亡を金銭的にも援助していたのがベットだった。これもベットの復讐の一つで、ユロ家の家庭崩壊を助長していたのだ。ようやくアドリーヌがユロを見つけた時には15歳のアタラという「蛇 (serpent)」のように身をくねらす美少女と暮らしていた。とうとうユロが帰還するという報告は、ヴァレリーを失い弱っていたベットに打撃を与え、ベットは復讐未完の無念のうちに死んでしまう。しかし、ベットの復讐は失敗したわけではない。家に戻ったユロは早速、太った炊事女のアガトという少女に言い寄る――

女房もそう永くはないから、男爵夫人にしてやってもいいよ<sup>(56)</sup>。

これを聞いたアドリーヌはショックのあまり死んでしまう、という結末である。

以上のように、「動物」に留意しながらストーリーを追ってみるとまずは動物の使用頻度が多いことに気が付く。つぎに、その動物の博物学的知識もありながら使用しているのだと思わせる。たとえば、ベットに雌ヤギというあだ名を与えたのも、ヤギの戦う際の習性を知っていたからであろうし、ベットと社会的弱者として身を寄せ合う相手ヴァンセスラス・シュタインボックにシャモアというヤギ科の動物の名前を与えたのも、同一種を意識したのではないかと思われる。ブラジル人のモンテスの生命力と男らしさを表すのにライオンではなく、ジャガーと虎を用いたのも、ジャガーが南米に生息する肉食獣なうえ、ブラジルの個体が最大種であるということを知っていたかのようだ。またライオンは飢えをしのぐために狩りをするが、虎は怒りを晴らすために虐殺するという残忍性を、ヴァレリーに復讐し死に至らしめる役どころのモンテスに利用したのだろう。アザラシやキリンという19世紀当時人々の人気を集め比較的新しくパリに入ってきた動物も利用しているところが面白い。そして無視できない

のは怪物の存在である。ベット・ヴァレリー・ユロの三人は凄まじいエネルギーを持ち、人間や動物を超越した存在として描かれている。バルザック晩年の作品に怪物的な登場人物を多く盛り込んだ理由は何か。怪物は何をもたらすのだろうか。バルザックの動物観を確認しながら答えてみたい。

### 3. バルザックが動物を使用するときとは

バルザックの動物に関する知識はどこから仕入れていたのか。前述したとおり、人間喜劇の構想は動物界と人間界との比較からでたものであり、ビュフォンの『博物誌』がベースになっている。その上に博物学者ジョフロワ・サンティレールとキュヴィエの二人を第一級の天才と称え、彼らの専門的な論文まで読んでいた。二人の名は、『ルイ・ランベール』(1832)『セラフィータ』(1835)『オノリーヌ』(1843)などさまざまなバルザック作品に言及がある。とくにジョフロワ・サンティレールには人間喜劇の要と言える傑作『ゴリオ爺さん』(1835)の献辞を捧げており、『ルイ・ランベール』は本人に贈呈している。書簡でも交流があり、ジョフロワ・サンティレールの息子イジドールから『ルイ・ランベール』についての感想がバルザックに送られており、ジョフロワ自身から食事に誘われてもいる<sup>(57)</sup>。そこで動物に関してのいろいろな話も聞いたであろう。また最晩年に結婚することとなるハンスカ夫人の娘アンナの婚約者は、昆虫標本収集家でもあるムニゼフ伯爵であり、バルザックは彼にプレゼントするため帝政時代の将軍であり博物学者でもあったピエール・ドジャン(1780-1845)の『ドジャン伯爵収集の鞘翅類目録』(1833)を探してやっていたことがハンスカ夫人への書簡から分かる。「昆虫の美しい大変貴重な版画集を見つけた」と喜びをつづっている<sup>(58)</sup>。また知人の博物学者J=C・ルメルシエ、パリ植物園で分類に携わっていたドゥルーズなどからも情報を仕入れていたと思われる<sup>(59)</sup>。

1842年バルザックはエッツェルの編集による『動物の私的・公的生活情景』<sup>(60)</sup>という当代の作家たちがオムニバル形式で書いた動物を主人公にした物語集に何作品か寄稿している。「最良の政体を求めるパリ雀の旅」<sup>(61)</sup>ではパリ雀がアリとミツバチの国を見に行くのだが、バルザックがアリとミツバチの生態を完全

に理解したうえでそれを巧みに利用していることに驚かされる。アリの世界では、世襲貴族たるアリのために、働きアリが献身的に整然と働く様子が詳細に描かれ、ミツバチの世界では、女王バチのローヤルゼリーをこぼしてうろたえる働きバチとの出会いから始まる。また「才知ある人々に模範として贈る二匹の虫の恋」<sup>(62)</sup>では顔料・染料の原料であるエンジムシ（コチニールカイガラムシ）の恋と、その世界を顕微鏡で覗き、養殖を成功させようとする人間の学者グラナリウス教授の娘と弟子の恋が並行して書かれている。そもそもエンジムシがメキシコからヨーロッパに輸入され養殖されているという苦難の歴史を知らないと書けない物語だ。こうして動物・昆虫についての知識を仕入れ、それらの特徴をうまく登場人物にあてはめながら、より鮮やかに生き生きとした印象で人間を描写することに成功していたのだ。

しかし、今回扱った『従妹ベット』において出てきた登場人物、とりわけベット・ヴァレリー・ユロの三人はこれまでのように動物種だけでは描写できない、どのタイプにも分類できない例外性があった。これを表現するのに、怪物（monstre）という語が必要だったのだろう。では、その新タイプの人間＝怪物はなぜ生れ、バルザックの小説の中でどのような役割をもった存在であろうか。

#### 4. 怪物とは

古代ギリシアの哲学者アリストテレス（前384－前322）は、怪物について、「子供は両親似るか、先祖に似るか、時には誰にもちっとも似ていないこともある」としてその事例を列挙してから以下のように言っている――

自然は生まれる子が不完全で、親に似ていないということによって、すでに怪物を作る準備をしているのであって、怪物というものも親に似ていない子の部類に属するのである<sup>(63)</sup>。

怪物の起源は「不完全で親に似ていない」存在であるのだ。つまり、さまざまな理由によって人間の範疇から逸脱してしまったもの、人間ならざるものが怪物になるのだ。ヨーロッパにおいて人間ならざるもの＝怪物とは、醜悪・不快・恐怖などの念を抱かせる存在であるが、怪物のラテン語 *monstrum* は「前

兆・警告」の意味を持っている。『従妹ベット』の中で *monstre* という語が15回使用されており、その数は人間喜劇作品の中でも群を抜いて多いと前述したが、実際にその使われ方をみてみると、「人でなし！」と翻訳される罵倒するときに用いられているものが多い。「人でなし！」と言われているのは主にユロとヴァレリーである。ベットはお人よしとしての表向きがあるため罵倒されることはないが、オルタンスに「あなたの恋人はヤギ鬣を生やした年寄り奉公人の怪物にちがいないわよね」と言われ、人ならざるもの＝怪物がお似合いであると思われるのである。同じ血から生まれた同種であるにもかかわらず、アドリーヌは美しく自分だけ醜く生まれてしまったという要素も怪物的である。もうひとつ、*monstre* の使われ方を見てみよう。これが、19世紀当時の怪物の正体であると言えないだろうか。

伝染病にかかり、むごたらしい姿になっているヴァレリーと、気管支炎にかかっているベットを、二人とも診療したビアンションという医師がいる。彼は初期の作品『ゴリオ爺さん』に登場した時は医学生であったが、それからあらゆる人間喜劇作品に何度も登場する名医だ。ビアンションは医師という職業について以下のように話す――

われわれ医者には、うまくゆけば病人を治癒できるという喜びがあります。奥様方に一家を飢えや墮落や貧困の恐怖から救い出して仕事を与え、社会に復帰させる喜びがあるのと同じです。しかしこれにひきかえ、司法官や検事や弁護士などは、どんな慰めがあるのでしょうか。彼らは、私利私欲のために行われる極めて悪辣な企みを一生の間追って過ごすのですよ。この社会的怪物 (*monstre social*) というのは、成功できなかったことを恨みはしても、悔恨などは決してしないのです<sup>(64)</sup>。

さらに、そんな根深い罪はいったいどこから来ているのでしょうか？と尋ねられるとこう答える――

金銭の力の増大のせいでしょう。金銭はエゴイズムの権化そのものですからね。昔は金がすべてではありませんでした、金に勝るのが認められていました。貴族があり、才能があり、国家への奉仕がりました。ところが今日では、法律が金銭をすべての尺度に変えてしまい、政治力の土台にしているありさまです<sup>(65)</sup>。

まさにベット・ヴァレリー・ユロは私利私欲を満たすために悪徳を重ね、悔恨など決してしていない。一度ヴァレリーは病によって酷い姿に変貌してしまい、悪臭を放ち精神的に弱くなったため見舞いに来たベットに、「あなたも悔い改めなさい」と諭す。それを聞いたベットは驚きこう返す――

自然のどこを見ても復讐があるじゃないの。昆虫だって攻撃されると、復讐欲を満たすために死んでゆくわ！<sup>(66)</sup>

そして正気に戻ったヴァレリーはこう言い放つ――

こうなっては神様に気に入られるほかないわね！せいぜい神様に許されるよう努めるわ、それが私の最後のコケットリーよ！ええ、そうですとも、こうなったら神様をたらしこんでやるわ<sup>(67)</sup>。

このように、ベットもヴァレリーも最後まで悔恨しないのである。ユロという痴情の怪物も悔恨することなく生き残り、手が付けられない。

ビアンシヨンの言う通り、私利私欲のため悪徳を重ね、悔恨しない社会的怪物 (monstre social) を生み出したのは、金の力の増大であった。ベットとヴァレリーは男たちから巻き上げた金を貯金し、株式投機をはじめ、年金と月々の利子を運用資金に回して利子をごっそりと儲けていた。生活に必要な家賃や衣装代はもちろん男もちであり、二人は知力を使ってめいめいの利子を増やして楽しんでいたので。ヴァレリーは「あどけない様子をしながら心は金庫でできている天使」<sup>(68)</sup>と描写されている。一方ユロ家の女性たちは、家庭の財産を管理することが出来ず、夫の浮気に金が流れていても止めることはできない。家計が苦しくても、夫のプライドを傷つけまいと金を要求することが出来ない。「家庭・家族 (Famille)」を基盤とする家父長的な19世紀の社会において、金にまつわることは男性の領分であった。当時のジェンダー観では、男性の側に「理性」と「知性」があり、女性の側に「官能性」と「獣性」が特徴となっていた<sup>(69)</sup>。よって、ベットとヴァレリーのように知性を持ち、さらに財産を管理する女性は、新タイプの女性であったといえる。そしてベットのように家庭に入らず未婚であり、素知らぬ顔をして「家庭・家族 (Famille)」を崩壊させる女性、またはヴァレリーのように職業的な娼婦ではないが、妻の立場で知性も獣性も持



ち「家庭・家族 (Famille)」の内部に入り込み、中からむしばんでいく女性を、社会を脅かす脅威ととらえていたのではないだろうか。またユロも英雄ナポレオンの父親像を、もはやかなぐり捨てて欲望にまい進する。これから社会は誰が導き、どのように流れて行くのだろうかという不安を象徴しているようだ。

『従妹ベット』は *Monstre!* という語が作中にたくさんちりばめられ、ベット、ヴァレリー、ユロ、の非人間的で、例外的なエネルギーが描かれ、今までとは違う何かが起きるといふ社会への「警告・前兆」に満ちた作品であるといえるだろう。

## 5. まとめ

バルザックとも親交の深い博物学者ジョフロワ・サンティレールは、怪物・奇形を出来そこないと規定した。しかしワニの化石の観察から、この奇形が、爬虫類から哺乳類への進化を促したということがわかり、奇形は進歩だと言っている<sup>(70)</sup>。ベット・ヴァレリー・ユロは例外的で怪物的存在だが、はたして単なる社会悪だったのだろうか。彼らこそ、新しい時代、新しい人間社会の在り方を模索し、突き進んだ進化形だったと言えるだろう。その結果どうなるか、この時にはバルザックにすら分からなかったであろうが、「フランス社会が歴史家であって、わたしはただその秘書になればいい」と語るバルザックは、もはや動物との比較では描ききれない時代が到来しつつあることを、怪物という語を使うことでこの晩年の『従妹ベット』で描こうとしたのではないだろうか。ベットを処女という一種の奇形、怪物に設定したのも、怪物こそ、「物事の偉大なる母」であり「いと高き世界の扉の鍵を持つ」存在であるということを示唆したかったからではないか。以上が、人間喜劇の初期作品から一貫して用いられる動物の比喩表現から読み解く『従妹ベット』における怪物についての考察である。

## 註

- (1) Honoré de Balzac, *La Cousine Bette*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», vol.7. 1976. 『従妹

- ベット』における考察は以下すべてこの版を使用した。
- (2) Honoré de Balzac, *Ferragus*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», vol.7. 1976. p.902.
  - (3) Balzac. La Comédie humaine. Edition en ligne の語彙検索によれば *monstre* という語は57作品に175回登場している。使用頻度は単純に計算すれば平均約3回だが、『従妹ベット』には15回と最多である。また『従妹ベット』と並んで「貧しき縁者」二部作を構成している『従兄ポンス』には13回使用されており、最晩年の作品に *monstre* が頻出する理由は考察の余地がある。
  - (4) *La Cousine Bette*, p.80.
  - (5) *Ibid.*, p.86.
  - (6) *Ibid.*, p.85.
  - (7) *Ibid.*, p.85.
  - (8) *Ibid.*, p.90.
  - (9) *Ibid.*, p.118.
  - (10) *Ibid.*, p.109.
  - (11) *Ibid.*, p.107.
  - (12) *Ibid.*, p.119.
  - (13) *Ibid.*, p.66.
  - (14) *Ibid.*, p.67.
  - (15) *Ibid.*, p.73.
  - (16) *Ibid.*, p.207.
  - (17) *Ibid.*, p.203, p.270, p.287, p.330, p.438.
  - (18) *Ibid.*, p.124.
  - (19) *Ibid.*, p.384.
  - (20) *Ibid.*, p.87.
  - (21) *Ibid.*, p.144.
  - (22) *Ibid.*, p.151.
  - (23) *Ibid.*, p.145.
  - (24) *Ibid.*, p.148.
  - (25) *Ibid.*, p.152.
  - (26) *Ibid.*, p.201.
  - (27) *Ibid.*, p.201.
  - (28) *Ibid.*, p.196.
  - (29) *Ibid.*, p.239.
  - (30) *Ibid.*, p.207.

- (31) *Ibid.*, p.207.
- (32) *Ibid.*, p.139, pp.251-252.
- (33) *Ibid.*, p.261.
- (34) *Ibid.*, p.319.
- (35) *Ibid.*, p.400.
- (36) *Ibid.*, p.388.
- (37) *Ibid.*, p.388.
- (38) *Ibid.*, p.236.
- (39) *Ibid.*, p.237.
- (40) *Ibid.*, p.401.
- (41) *Ibid.*, p.211.
- (42) *Ibid.*, p.219.
- (43) *Ibid.*, p.220.
- (44) *Ibid.*, p.237.
- (45) Buffon, *Histoire naturelle générale et particulière avec la description du cabinet du roi*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2007, Histoire naturelle des animaux, histoire naturelle des quadrupèdes, Lion, p.848.
- (46) *La Cousine Bette*, p.409.
- (47) *Ibid.*, p.419.
- (48) *Ibid.*, p.219.
- (49) *Ibid.*, p.219.
- (50) *Ibid.*, p.142.
- (51) *Ibid.*, p.341.
- (52) *Ibid.*, p.341.
- (53) *Ibid.*, p.311.
- (54) *Ibid.*, p.346.
- (55) *Ibid.*, p.302.
- (56) *Ibid.*, p.451.
- (57) Correspondance, textes réunis, classés et annotés par R. Pierrot, Classiques Garnier, 1960-1969, t. II. 35-79, 35-80, 35-87, 35-155, 35-157, 35-158, 35-161.
- (58) Lettres à Madame Hanska, textes réunis, classés et annoté par R. Pierrot, Classiques Garnier, 1967-1969, t. I. 15-Février-1846.
- (59) 『動物寓話集 他』バルザック幻想・怪奇小説選集 5、私市保彦・大下祥枝訳、水声社、2007年。
- (60) *Scènes de la vie privée et publique des animaux*, Études de mœurs contemporaines

- Publiées sous la direction de P.J. Stahl, Vignettes par Grandville, Athena press, 2009.
- (61) Voyage d'un moineau de Paris à la recherche du meilleur gouvernement, *Scènes de la vie privée et publique des animaux*, Volume 1.
  - (62) Les amours de deux bêtes, *Scènes de la vie privée et publique des animaux*, Volume 2.
  - (63) 『アリストテレス全集第9』第6章「奇形の遺伝、両親との類似」島崎三郎訳、岩波書店、1969年。
  - (64) *La Cousine Bette*, p.427.
  - (65) *Ibid.*, p.427.
  - (66) *Ibid.*, p.432.
  - (67) *Ibid.*, p.433.
  - (68) *Ibid.*, p.188.
  - (69) 『優雅な生活<トゥ＝パリ>パリ社交集団の成立1815-1848』、アンヌ＝マルタン＝フジエ著、前田祝一監訳、新評論、2001年。
  - (70) *Des monstruosités humaines*, formant le deuxième tome de la philosophie anatomique par M. Geoffroy Saint-Hilaire, ([gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1101916/fl.image](http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1101916/fl.image)).